

見える、見えない

たがわ やや
田川 椰々

私は、先天性の完全房室ブロックという心疾患を患っており、今は心臓ペースメーカーを左肩付近に入れて生活をしています。私の障害は目に見えません。なので、普通にしていれば健常者と同じように見えます。

実際にこの病気がわかったのは先天性の心疾患にも関わらず小学1年生の時に、当時はなんで運動ができないのだろうとばかり思っていました。今思えば病気のことを理解しきれていなかったからだと思います。私は覚えていませんが、先天性の心疾患にも関わらずこの病気が判明するまで生きられたのは奇跡に等しいと医者に言われたそうです。高学年にもなると、運動会で一部の演目しかやらないと、こそそと「なんであの子はちょっとしかやらないの?」「へえ障害があるんだ…」などといった保護者の声や視線を感じるようになりました。目に見えないからこそ、不思議に思っていたのかもしれませんが。学校内では先生や友達、他のクラスメイトなどに自然と理解は得られていて守られていました。しかし、その時になってやはり自分は違う人間なんだと強く思うようになってしまいました。決して障害者だと思われることが嫌な訳ではありませんでした。見た目で判断されることが一番嫌だったのです。

中学校に通うようになってからも変化はあまりありませんでした。しかし、中学2年生になって手術を受けました。これは自らの希望で行ったものです。手術を受けようと思ったのは、今以上に少しでもできることを増やしたかった、ただそれだけです。体育の授業はいつも見学でできるものも限られており、体育の時間だけはいつも疎外感を感じていました。この疎外感をなくすにはやはり手術を試してみようと体育ができるようになるしかないと考えた結果です。当時新任できた体育の先生に病気のことをうまく理解してもらえず、口論になり悔しい思いをしたからという理由もあります。術後は左肩が挙げられなかったため、服は少しの間左腕を通さないで着ていました。その様子でクラスメイト等は少し戸惑っていましたが、すぐに普段通り接してくれました。現在は腕を挙げることはできますが、肩に圧迫がかかるとペースメーカーに悪影響が出るのでその点だけ注意しています。術後すぐに運動ができたわけではありませんでしたが、運動許可がでたとき、今までできなかった「走る」という行為ができただけでも嬉しかったのを今でも覚えています。

高校時代は、念願の体育の授業を一部じゃなくすべて受けることができたり、とても充実した日々を過ごしていました。しかし、高校3年生になって進路を考える際に壁に当たりました。進学するか就職するか。大学進学の道も考えましたが、これ以上親に負担をかけまいと就職の道を選びました。しかし、高校卒でしかも障害者、という人間を雇ってもらえる民間企業は障害者の法定雇用率が決まっていますが簡単に見つかりませんでした。そんな中で当時の担任の先生に県職員採用試験の障害者枠を進められました。調べていくうちに福祉や教育など型にとらわれず働ける点に魅力を感じ受験をしました。これが今の私の仕事です。

先ほどもお話した通り、私は今年の4月から県職員で福祉関係の仕事を主にしています。まさか福祉系の業務に携わることができるとは思っていませんでした。これも何かの縁だと思っています。高齢者や難病の方、生活困窮者など弱い立場にある人と向き合って仕事をしていく中で、やはり見た目で判断してはいけないことの重要さを毎日考えさせられます。目に見える障害であろうと、なかろうと、障害者でなかろうと見た目だけで判断してはいけない。今の世の中、なんでも見た目で判断することが多いような気がします。身をもって実感したこの気持ちを忘れず、今後も県民のために、そして一障害者として胸をはって働いていきたいと思っています。